最新キューメイキングと
伝統工芸のコラボが生み出した

奇跡の21本

MIYABI
Exceed Special Japan Edition

2021年末に株式会社三木(群馬県富岡市)が発表した新作キューは、世界中のキューマニアを興奮させた。写真を見るだけでも、豪奢にして気品漂う特別感が伝わってくる。しかし全容は見えてこない。どこで買えるのかもわからない。そこで本誌は年明け間もない底冷えの京都で、雅の正体に迫るべく取材を敢行した。すると21本の作品が縁と情熱が生み出した奇跡的な誕生であったということが見えてきた。

取材協力:株式会社三木、
株式会社松久宗琳佛所、堀金箔紛株式会社
取材・写真・文/髙田明

ロングドライブの理由

「私が京都へ行きます。『雅』の現物を見てもらえる最後の機会になると思いますので」

『雅』とは、昨年末に発売された『EXCEED』の特別仕様のこと。特別仕様という言葉では全く足りないが、ふさわしい形容が見付からないくらいの『前代未聞のゴージャスなキュー』だ。

そんなキューの記事を書かせてもらうにあたり、三木さん（株式会社三木代表取締役社長・三木一則氏）にコンタクトを取ったところ、冒頭の返事をいただいた。そして年明け間もない平日、朝5時発で群馬県富岡市から京都市まで走ってきた三木さんと合流した。

「送るのも『万が一』が怖いですし、自分で積んで走るしかないと思いました（笑）」

ダークスーツを軽やかに着こなす三木さんは、ロングドライブの疲れを微塵も見せることなく爽やかな笑顔で自走した理由を明かす。こうして雅の誕生を探る旅が始まった。

先生に会うのが怖い

「徹底して『和』にこだわりました。細部のひとつひとつもオリジナルで、既存のパーツを使った箇所は皆無です。どれを取っても簡単にできた箇所はありません」

数々の名作（キュー）を世に送り出してきた三木さんにとっても、特別の中の特別といった様子。「截金（きりかね）が映えるようバットをデザインする作業は楽しかったです」とも。

我々はまず京都市役所近くにある『堀金箔紛株式会社』を訪ねた。創業310年という老舗らしい構えで、中に入ると金箔押しが施されたギターや自転車が展示されている。

この会社で取締役を務める荘雅幸さんがビリヤード愛好家で「キューに截金の装飾をしたら面白いのではないか？」と発案したところに、雅の原点があったのだという。

「截金とキューは相性が良いはずだ。そんな思い付きでしたが、まさかここまで本格的な企画になるとは思いもしませんでした（笑）」

同社の応接室で最新の金箔事情を伺うなど談笑を重ねた後、3人で歩いていよいよ『松久宗琳佛所』へ向かう。

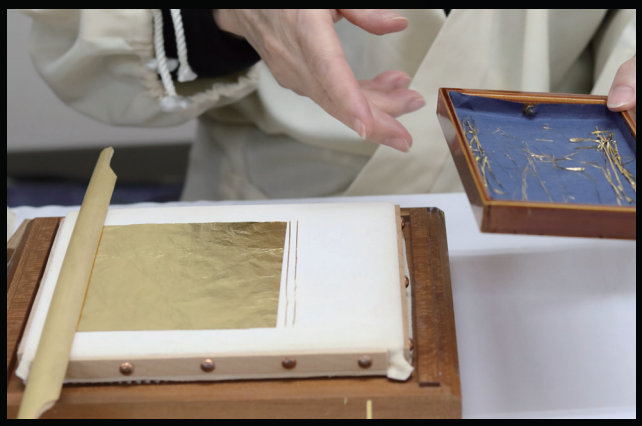
「正直、ドキドキするというか、先生に会うのが怖いんですよね」

三木さんが神妙な面持ちで意外な言葉を口にした。

「制作の過程で、何度も何度もダメ出しをして、作家の先生に細かい指示を繰り返すのが心苦しくて、途中でそれまでの費用を支払って雅の企画自体を取りやめようと本気で考えたほどでした」

截金はフリーハンドの技法で、作家のフィーリングが反映される点も味とされている。それを十分に理解する三木さんだったが「海外の人が手に取った時、細部をチェックして不良品と捉えてしまう」ことを懸念していた。結果として「心が痛むほど先生に修正依頼を重ねた」のだという。

松久宗琳佛所にて。截金は本来、仏像や仏絵といった仏教関連のみに施される技法だった。截金師の松久真やさんは既成の枠を超えた活動を行っている



4枚の金箔に熱を加えて圧着したものが截金の材料となる。これを線状や意図する形に切ることで装飾のパーツへと変身していく

截金は地道な手作業によって施される。膨大な手間と時間をかけて吹き込まれた雅の輝きは、見る人をうっとりさせる仕上がりに

個体差も手作業ならではの味わい。しかし雅は21本が均一の仕上がりになるよう、極限の精緻を追求した。まさに近代工業と伝統工芸のコラボ作品

MIYABI
Exceed Special Japan Edition

【和の追求】
雅のコンセプトは『和』。ベースのEXCEEDにはラピスラズリや長く伸びる白色の剣といったインレイがミクロの誤差なく施され、截金装飾と完璧なマッチングを果たした。さらに市松模様のリングやアルミ削り出しのジョイントキャップ、ウェイトボルトも専用のカートリッジを作りMIYABIの刻印を入れるなど、完全にオリジナルで固めた

そんな情報を得たため私もドキドキしながら、大きな仏像が飾られた佛所のエントランスへと足を踏み入れた。そこで温かく出迎えてくれたのは、同所々長で佛師の松久佳遊さん。姉の真やさんと共にエレベーターで上階へと案内してもらう。荘さんとは仕事の取引きが長いそうで、松久姉妹とは親しくフレンドリーな間柄と見受けられた。

未来につながる仕事

三木さんが完成の報告をしつつ丁重に御礼を述べると、真やさんが笑顔で応じた。明るいオーラを纏い内側から発する強いエネルギーを感じさせる人だ。三木さんが雅を取り出してゴールドモデルとプラチナモデルの2本を机に並べる。

神々しい気品に一同が息を飲む。
「こうして表面に塗装がかかると、一段と截金が引き立ちますね」
真やさんの目が一段と輝いた。共同制作者に挟まれて雅も輝きを増しているかのようだ。
「本当に何度も何度も細かい注文を出してすみませんでした」
いつも冷静な三木さんの新しい表情を垣間見た。
「とんでもないです。私達も勉強になりました」
そこから続いた真やさんの話は「新しい試みに心が躍った」ところに始まり「工芸品に工業規格を求められたことが初めての体験」であったこと。さらには「現代工業と伝統工芸の対決」というムードで職人達が士気を高めていたことも明か

【カーボン昼夜斜紋西陣織】
ジョイントカラーとバットキャップに使われたのは、カーボン繊維を京都の伝統産業『西陣織』の昼夜斜紋という技法で織った生地。立体感と上品な光沢が気品を醸し出している。こうしたディティールへの拘りが雅を究極のキューに仕上げた。21本のためにアイデア・手間・コストが惜しみなく注ぎ込まれたことが窺える

完成品を前にコラボの道のりを振り返って談笑する三木一則氏（株式会社三木代表取締役）と松久真や氏（松宗院截金代表）

された。

その中で興味深かったのは「紹介してくれた荘さんに心配をかけてはいけない」と、二の足を踏むタイミングを失っていたこと。三木さんと真やさんのコラボは、静かにぶつかり合う情熱の結晶であったのだ。何かのタイミングが1つずれていたら、雅は完成に至っていなかったのかもしれない。

「結果、私達は截金に対する新しい意識を持つことができ、未来につながる仕事であったと思います」

これを聞いて安堵の表情を浮かべた三木さんに対して、真やさんはこんな言葉も発した。

「世の中がこんな事態（コロナ禍）になって、もしかして（行き場を失った）完成品を抱えて大変なことになっているんじゃないかと心配もしていたんです」

21本の行き先は瞬時に

三木さんは「いえ、コロナの影響もあって各パーツや箱の制作などに時間はかかり発売は予定より遅れましたが、おかげさまで雅は各国のディーラーからの発注でほぼ瞬時に行き先が決まりました」と報告。

作品が好評であったことを素直に喜ぶ真やさん。「キューという私達が知らない世界で截金が広まることは喜ばしいことです」という言葉は截金の伝道師ならではの発想だろう。

「本来であれば2020年に20本リリースする予定でしたが、結果としてプラチナモデル1本を加えて21年に21本出せたことも良かったです」

そう、リングに施された市松模様は『2020 TOKYO』を彷彿させる。五輪モデルという訳ではないが、同様に延期されてスペシャルな1本が加わった点も大きな流れだったのかもしれない。

さらに三木さんが「20本でなく50本でも即完売だったと思います」と続けると、真やさんから「無理です無理です」と遮られて、その場は笑いの渦に包まれた。

1本でも多く世界へ

「考えてみたら、長いキュー作りの中で、外部とコラボをしたのは初めてのことでした。仕上がってきた時には僕自身も『これはとんでもないキューができた』と驚いたほどの出来栄えです。これほど喜ばれるキューが作れるのであれば、いつか全く異なる切り口で截金のキューを制作したいです。松久先生が応じてくれるのかはわかりませんが（笑）」

計21本の雅は、この記事が出る頃には世界16カ国へと旅立っている予定で、日本国内には1本のみ供給される。三木さんも「会社に1本残しておくべきだったと後悔」したことを仄めかしたが「このキューを通じて截金が世界の人に知られる」ことを喜ぶ真やさんの言葉を思い出して「1本でも多く世界へ届けられたことが正解だった」と思い直したという。

奇跡の21本

雅はキューのパーツのみならず、紙箱やウェイトボルトのセットやジョイントキャップにいたるまで、オリジナルで構成されている。「スペシャル・ジャパン・エディション」の名の通りに。

「ロットが少数なので、すべてにすごいコストがかかっていました（笑）」

そう笑えるのも、奇跡の物語が完結に差し掛かった今だからこそだろう。

仮に。もし仮にEXCEEDと截金のコラボに続編が出るとしたら。今回、幸運にも入手できた層（ユーザーやディーラー）が、真っ先に手を挙げて求めるに違いない。構想段階で売り切れ必至だ。

「今回も各国の色んなディーラーから『なぜ1本しか売ってくれないんだ』というクレームが入りました」

史上に残る超のつくハイエンドモデルに買い手が殺到した雅はもはや伝説の域。

共同制作者から直に話を聞きながら、本来は拝むことさえ叶わない作品を間近に見るという奇跡に感謝。

雅の截金装飾に携わった截金師の皆さん。「工業規格の再現性を求められたのは初めてのことでしたが、新たな截金の世界が見えてきました」と振り返る